



ONE WORLD Info

英語教育 通信

新しい教育課程へ向けて 小学校・外国語活動と中学校・英語で見えてきた課題 … 吉田 達弘 ●

中学校における授業実践と学んだこと … 福水 勝利 ●

「英語好き」な子を育てるために 小学校における英語活動 … 鈴木 秀明 ●

小学校英語活動支援員として 実践の1コマ … 木村 利香 ●

“街の英語” 誤用診断② … 野田 小枝子 ●

今ドキ英語事情 Once a noun, always a verb! … Peter J. Collins ●

新しい教育課程へ向けて 小学校・外国語活動と中学校・英語で 見えてきた課題

兵庫教育大学 吉田 達弘

学習指導要領が改訂され、小学校では平成23年度から、中学校では平成24年度から新しい教育課程が実施される。さまざまな議論を経て第5・6学年に導入されることになった外国語活動についても、この移行期に多くの学校で実践が始まっている。平成21年度の文部科学省による公立小学校の教育課程実施状況調査によれば、平成21年度に5・6年生で外国語活動を実施する計画であると回答した学校は、全体の98%になっている。また、週1回にあたる年間35時間以上の授業時数を予定している学校は、5年生で57.6%、6年生で57.8%、平均授業時数は5、6年生ともに28.2時間となっている。

一方、中学校の外国語科（以下、英語）では、授業時数が週3時間から週4時間へ増加されることや、必修の語数が増加されることが話題になったが、実際にどのような授業実践を行えばよいか、また、外国語活動との接続はどうしたらよいかということについては、まだ真剣な議論が始まっていない、というのが筆者の実感である。

本稿では、新しい教育課程への移行期間に、小学校の外国語活動、中学校の英語でどのような取り組みが行われているか、また、新しい教育課程に向けてどのような実践に取り組んでいけばよいかを述べてみたい。

1 小学校・外国語活動の取り組みと課題

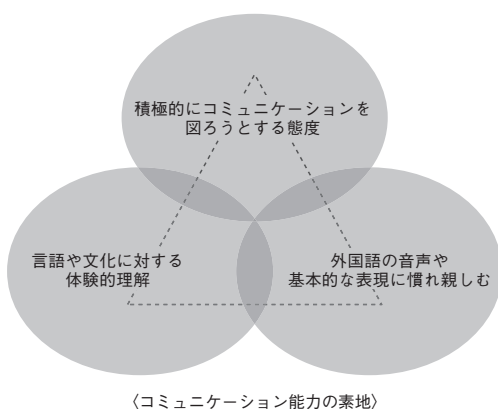
(1) コミュニケーション能力の素地

新教育課程への外国語活動の導入については、中央教育審議会での議論でも賛否が最後まで割れ、最終的に学習指導要領の中に「コ

ミュニケーション能力の素地を育てる」ということを目標に、第5・6年生に導入されることとなった。「コミュニケーション能力の素地」という新用語については、分かりにくいという声を小学校の教師から聞く。外国語活動の目標には、

外国語を通じて、①言語や文化について体験的に理解を深め、②積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、③外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しめながら、コミュニケーション能力の素地を養う。（丸数字は筆者による。）

とあり、①、②、③の3つが重なり合いながら、「コミュニケーション能力の素地」を形成していく下図のようなイメージになろう。



このように目標の関係をとらえ、この図を指導案中に提示すれば、授業や授業中の活動がどの目標を意識しながら行っているかを明示でき、3つの内容がバランスよく配置されているかどうかを確認する見取り図となる。例えば、チャンツやリズムによる口慣らしの活動は、子どもたちも抵抗なく、楽しんで取

り組む活動であるが、これは上で述べた3つの目標のうち「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむ」ことを狙った活動である。したがって、そこで英語と日本語の音やリズムの違いなどに気が付くことにつながっているか、あるいは、この活動が、他の2つの円と関わり合いながら、「コミュニケーション能力の素地」をどのように支えているのかを意識することが大切であり、楽しいからといってチャンツばかりでは、外国語活動＝反復練習だという認識が児童たちに生まれてしまいかねない。

(2) 教師の意識や研修ニーズの変化

校内研修や地域などで行う一斉研修では、授業ができるか不安だという声を先生方から聞く。「どうしてやらなきゃいけないんですか」という声は少なくなってきたが、その問いに対しても、「必修になったからです。今はとにかく教え方を考えましょう」では何の解決にもならない。「思考停止」が一番怖い。外国語活動を通して、どのような児童の学びが生まれるのかを考え続けてみたい。

移行期間に授業実践を経験された先生の様子を見ると、その不安や意識に変化が見られるようになってきた。例えば、昨年末にある自治体では、小学校の教員を対象に、外国語活動に関して教師が抱えている不安や研修のニーズについて調査したが、その結果によると、「外国語活動の指導全般に対して不安を感じるか」という質問に対して、外国語活動の指導経験の有無にかかわらず、回答した50%強の教師が不安を感じていた。しかし、指導内容を細分化してたずねてみると、指導経験ある・なしで回答傾向がやや異なっていた。例えば、「積極的に外国語を聞いたり、話したりさせること」、「外国語の音声やリズムなどに慣れ親しませるとともに、日本語との違いを理解させ、言葉の面白さや豊かさを感じさせること」、「クラスルーム・イングリッシュを用いて児童に指示を出し、授業を進めること」という指導内容に対しては、指導経験

のある群が指導経験なし群よりも低い不安感を示す傾向にあった。つまり、少なくともこの1年間で外国語活動の指導を行った教師は、外国語活動で扱われる「英語」の内容に対して理解を深め、それまで抱いていた不安を軽減できたのではないかと推測される。もちろん、指導経験のある教師は、そもそも外国語活動に対して意欲的であり、英語を得意とする教師である可能性は大いにあるので、過度の一般化はできないが、少しでも実践の経験を積むこと、あるいは、他の教師の授業を見て研修を行うことが、不安感を下げるのに有効だと思われる。

また、同じ調査からは、外国語活動の指導一般に対して不安感を強く感じる教師群は「クラスルーム・イングリッシュの使い方」、「歌やゲームなど活動の進め方」、「ALTとのチーム・ティーチング」に関する研修を多く希望するのに対し、不安感を感じない群は、「指導計画の立て方」、「評価の行い方」に関する研修を希望する傾向にあることも分かった。少なくとも1年間の外国語活動の実践を経験し、不安感が低くなった教師は、毎時間の授業をどうつなぐか、また、学びの成果をどのように見取るかといったことに対する研修のニーズを持ち始めている。今後は、校内研修とともに、学校や個人のニーズにあわせた研修、特に、指導計画や単元計画に焦点を当てた研修が必要となる。

(3) 「英語ノート」

いわゆる文科省が指定する拠点校では、自分たちで指導計画や教材を用意し、それに合わせた授業実践を進めていたので、平成20年度に「英語ノート（試作版）」が配布されたとき、教師たちは、使いにくいなああと口をそろえて言っていた。しかし、この2年間「英語ノート」で扱われている教材や活動を吟味していくうちに、これまで独自に考えてきた活動と類似したものやその発展型の活動も多く含まれていることに気付き、年度末には、「良くできている部分もある」と評価を変え

る教師も多かった。

拠点校の先生方は、自分たちの作ったカリキュラムという視点から「英語ノート」を眺めることができ、どう使うかよりも、教材を目の前の児童たちに合わせて、どう加工するかという意識があったのだと思う。一方、平成21年度に初めて「英語ノート」を配布された学校では、そのような視点が必ずしもあるわけではないので、どうしても「英語ノート」をどう使ったらいいのだろう、というハウツーに多くの教師の関心が向いている。まずはハウツーを学び学ぶこと、また、技の引き出しを多くすること自体は、何ら悪いことではないが、それが行き過ぎると、活動や経験の「パッケージ化」が進み、活動の中子どもたちの経験の豊かさや、次の授業へのつながりが忘れ去られてしまう。言い古された表現だが、児童たちが「英語ノート」を、ではなく、「英語ノート」で何を学ぶのかを考えたい。特に、どの児童も同じことを学ぶことを目的として作られた「英語ノート」には、一人ひとりの生徒が表現したい言葉が十分に準備されているわけではない。児童たちの声に耳を傾けながら、「英語ノート」を積極的に加工したり、独自教材を使ってみたい。

2 中学校・英語での取り組みと課題

先にも述べたように、中学校での新教育課程に対する反応は少し遅いというのが筆者の印象である。教師からは「教科書が出てきてからでないと考えられません」という偽らざる、しかし、もう少し自分たちでも考えてみようよ、と思わざるを得ない声も聞く。

(1) 言語活動の統合

この数年間に現行の学習指導要領下での教育課程調査や学力定着度調査が行われ、英語では、中学生の「書くこと」に関する学力の定着に課題があるという結果が示された。特に、「まとまりのある内容を書く」という問題での正確率の低さ、無回答率の高さが指摘されている。

ただし、こういった調査で、書くことの問題（まとまりのある内容を3～4文で書かせる問題）は、必ず、テストの最後の方に出題されていた。つまり、生徒が最初から順番に問題を解いていったのであれば、スコアの低い「書くこと」だけが問題なのではなく、そこにたどり着くまでに「息切れ」している可能性もある。つまり、聞くこと、読むことのテスト問題の処理にも課題があるのではないかと、ということは容易に想像できる（この点で、一連のテストの妥当性については議論の余地があると思うが）。アウトプットの活動が減った結果、聞いたり、読んだりするというインプット系の力も落ちてしまうという悪循環が発生している可能性もある。

しかし、筆者は、この点について中学校の英語教員にやや同情的である。というのも、現行の学習指導要領では、音声によるコミュニケーション活動を重視されていた上に、週3時間の授業時数では、インプットされた内容をアウトプットする時間がなかなか確保できないからだ。この課題を克服するために、新教育課程では、授業時数が週3時間から週4時間に増加され、4技能のバランスと統合を考えた指導が重視される。

もちろん、授業時数を単に増やしても中学生の力を伸ばすことにはつながらない。中学校の英語の授業では、「基礎・基本の定着」を目指して、言語材料の反復と記憶の定着を狙った活動や指導法がさかんに用いられてきた。「基礎」が重要なのは誰も否定しないが、「基礎」の上にどのような「建物」を作るのかを考えることが重要となりそうだ。

基礎の上の建物を考えるときに大切なのは、建物の出来栄だけでなく、建物に合わせた基礎作りである。「まとまりのある内容を書くこと」が課題だと上で述べたが、だからといって、「はい、夏休みの思い出について5文くらいで書きなさい」といった活動をただ与えても課題の克服にはつながらない。実際に書き出すまでに、生徒たちの思考を耕

し、それをマッピングなどの手法で紙の上に引き出し、構造化するというステップを踏んだ基礎作りが重要だ。そして、生徒が書いたものを、教師が読んだり、あるいは、生徒同士で読み合う、発表するといった「読み手（聞き手）」を想定して書くこと（＝建物）が必要となる。日常生活を考えてみると、書くという活動は無目的に行われることはなく、何のために書くのか、だれに向けて書くのか、どのようなスタイルで書くのか、といった状況設定が必ずある。生徒にとって意味のある状況を設定した活動を考え、プロダクトとともに、プロセスを考えることで、「習得」から「活用」に向けて学習を発展させる手が見つかるといえる（この点については、英語教育関連書ではないが、三森 [2005] が参考になる）。

指導計画では、「大きな」言語活動（*ONE WORLD English Course* の Project のような活動）をいつ実施するかだけでなく、「帯活動」を行いながら、短い時間で日々の学びをどうつなぐかを意識することも大切になる（本多 [2009] が参考になる）。1年後にはどんなパフォーマンスができるのかという学習の到達度を意識すること、また、それをどのように評価するかということをこれまで以上に意識したい。

(2) 小中の連携

小中の連携については、学校や地域で取り組みが始まっているが、「小学校は中学校の良いところ取りをしている」、「中学校には中学校の学び方がある」と中学校の教師の反応は案外「冷たい」。気持ちはよく分かる。確かに、中学校の学びは小学校とは異なる。しかし、どう異なるのかを分析して授業に取り組んでいる中学校教師はそう多くはない。

例えば、外国語活動で児童たちは、表現を音声のチャンクとして記憶する。そのチャンクの表現に児童たちの身近な語彙を織り交ぜる形でコミュニケーションの活動を行う。一方、中学校では、表現のチャンクの中の語と

語のつながりや仕組みに気付くようになる。ここに文法知識の役割が出てくる。語と語のつながりや仕組みを知ること、表現の創造性が増す。

チャンクの中の語と語のつながりは文字言語を学ぶことによって見えてくる。したがって、中学校に入ってくる生徒が持っているある程度チャンク化された表現の知識が、どのように文字と結びつくのかといった意識を高めるための指導法（フォニックス）を工夫する必要がある。同時に、読むこと、書くことの指導についても、文字を認識する、なぞる、写す、見ずに書くなどと、これまで以上に丁寧にステップを踏んだ指導を考えなければならない。

連携については、実際にお手伝いしてみて、さまざまな難しさを感じる。しかし、外国語活動を経験した生徒たちの学びの経験を断絶させずに、継続させ、発展させることが大切だ。このことは、日本の英語教育が直面する新たな、そして、重要な課題だが、この問題に取り組むためにも、中学校の先生方には、小学校の授業を参観したり、できれば、一緒に授業作りを行うことをお勧めする。「上から目線」ではなく、一緒に子どもを育てようという意識が共有されたときに、子どもたちの学びもつながり始める。そして、外国語活動での楽しさが、「ただしんどい」だけの中学校英語ではなく、創造性や知識の活用という新たな楽しさと難しさの体験につながってほしいと思う。

【参考文献】

- 三森ゆりか (2005)『徹底つみ上げ式 子どものための論理トレーニング・プリント』PHP 研究所
- 本多敏幸 (2009)『英語力がぐんぐん伸びる！コミュニケーション・タイム 13の帯活動＆ワークシート』明治図書出版

中学校における 授業実践と学んだこと

千葉県立印旛明誠高等学校 福水 勝利

はじめに

中学校から高校に戻って1年が経つ。戻れば戻ったで中学校の良いところ、高校の良いところが目につく。

筆者は千葉県立成田国際高等学校で文部科学省指定のスーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール (SELHi) などの研究を行ったあと、平成18年4月から3年間、中高人事交流で成田市立中台中学校に勤務した。そこでは、中学校での勤務という得がたい経験のほか、千葉県教育委員会指定の小中連携英語学習・Gateway to English Language という研究を学区内4つの小学校の先生方と行い、小中9年間を見通した英語の学習指導の経験ができた。

成田市立小中学校での英語教育

成田市では、平成20年度よりすべての小学校で「教科として」小学校1年生から英語を指導している。また、中学校では平成21年度よりすべての学校で教育出版の *ONE WORLD English Course* を使用した週3時間の授業（以下、「レギュラー」とする）のほかに、週1時間の特設の授業（筆者が勤務した中台中学校では「第4英語」と呼んでおり、以下、中台中での通称の「4英」を用いる）が展開されている。

これらの授業の指針として、成田市教育委員会では『成田市小中学校連携英語科指導基準』を作成しており、それぞれの授業の年間計画も作成している。

中台中の4英

中台中学校区の小中学校は、平成14年度より2期・計6年間、千葉県教育委員会より小中連携英語学習の研究指定を受け、研究を行った。中台中学校では、平成16年度より4英の指導を行っている。「実践的コミュニケーション能力をつける」ことを目標とし、コミュニケーション活動を中心にJTEとALTによるチーム・ティーチングで授業をしている。

研究中の4英のとらえ方は以下のとおりである。当時の研究推進委員会に提出した資料より振り返ってみる。

《週3時間のレギュラーの授業で基礎・基本を身につけ、4英で応用する。市教育委員会あるいは我々が行う生徒向けアンケートの結果、「書く力」「話す力」を伸ばしたいと考える生徒が多く、「表現する」ことに興味・関心が高い。また、「書く力を伸ばす」指導が十分ではないという認識を各教員が持っている。レギュラーだけでは「書く」までは十分に指導できない。そこで、4英では「書く」「話す」といった「表現すること」に力を入

れ、英語を使って楽しめながら生徒の実践的コミュニケーション能力の育成をしていきたい。》

前置きが長くなったが、本稿では筆者が担当した「4英」での実践例を紹介したい。

中学1年生 入学直後の実践 (ポスターの作成)

●概要

成田市内の公立小学校の児童は、3年生よりゲームや場面を想定した活動の中で文字にふれている。成田市教育委員会による教員向けアンケートでも、「アルファベットを教える時間が短縮された」「Lesson 1の導入は復習程度の内容にした」といった回答が見られる。



しかしながら、小学校卒業段階での文字の定着度合いに差があることは事実である。ただ単にアルファベットを何度も何度も書き写すといった練習ではなく、ポスターを作成するという文字を書くことが必要な活動を設定することにより、アルファベットの大文字・小文字の定着を図ることにした。

年度の初めで、高校と比べて圧倒的に多い掲示物を作成し掲出することで、校内の英語環境をつくりだすことと、文字だけでなく絵も描かせることで英語があまり得意でない生徒に興味を持たせることもねらいとした。

●授業の実際

本単元は4時間構成とした。ポスターの内容は、見る人に何らかの行動を呼びかけるもの、例えば、「教室を離れる時には電気を消そう」「廊下を走るな」などであればよいこととした。

- 1時間目—単元の説明を聞く。呼びかけの表現（命令文）を学ぶ。過去の生徒の作品を参考にして、自分の作品の構想を練る。
- 2・3時間目—作品を制作する。
- 4時間目—英語の表現の確認を受け、作品を完成する。

1時間目では、毎時間実施しているウォーム・アップ（挨拶、Short Casual Talk、簡単なQ&A）のあと、本単元の説明を行った。生徒にポスターなどの掲示物に見られる表現を日本語で発表させ、ALTにそれらは英語でどう言うのかを紹介してもらい、口頭練習を行った。その後、過去の生徒たちの作品を見せ、自分の作品の構想を練らせた。生徒は活動の終着点をはっきりと理解でき、身近な先輩たちの作品で興味・関心を高めることができた。

2・3時間目には、作品の制作に取り組んだ。筆者とALTが机間指導をしながら生徒の取り組み状況を把握したり、質問に答えたりした。3時間目の終わりごろには作品が完成する生徒も出てきたので、もう1枚の制作を指示した。

絵の巧拙は問わないが、清書前に英語による呼びかけの表現の確認を行い、4時間目の終了までにはほぼすべての生徒が作品を完成することができた。

中学2年生 5月の実践 (My Memories of Kamakura)

●概要

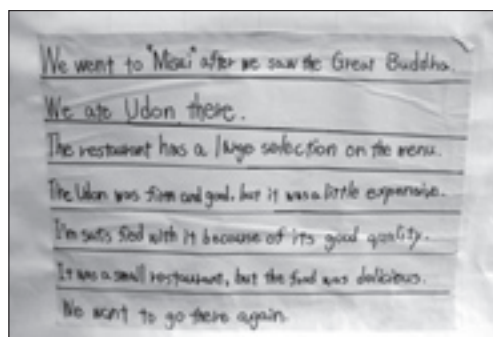
校外学習の思い出を英語で記録し、発表する活動である。5月実施の鎌倉への校外学習を題材とすることで生徒に興味を持たせながら、「書く活動」と「話す活動」を関連づけ、「表現する」ことに取り組ませた。

校外学習を題材として取り上げたのは、中学生であれ高校生であれ生徒の口から往々にして発せられる「書くことがないから書けない」ということを避けるためである。残念ながら校外学習に欠席した生徒も当日の出来事を書くようにすることで、誰もが何かしら「書くこと」があるようにした。こうすることで、「書けない」のは英語の問題であり、英語でどう表現したら良いのかを教員が支援すれば生徒全員がある程度の量の文を書くことができる。

また、終了した行事を題材とすることで、既習の過去形を用いることが必要となり、書かれたものの内容に広がりが出る。接続詞andやbutを用いた重文や、接続詞whenを用いた複文といった既習事項の応用の場にもなる。

書く活動のあと、校外学習時の班ごとに自分が書いた作品を口頭発表する「話す活動」

に取り組む、思い出をクラスで共有する。



●授業の実践

本単元は4時間構成とした。

- 1時間目—筆者やALTと生徒の相互の会話・問答をとおり、鎌倉での出来事について話す活動に取り組む。ALTが作成した作品例より英文の構成を知り、書く活動のためのアイデアの活性化を図る。
- 2時間目—書くことに取り組む。
- 3時間目—書くことを終わらせる。口頭発表する際の態度といった注意事項を理解する。
- 4時間目—班ごとに口頭発表する。

2・3時間目の書く活動に当たっては、書く内容がなかなかまとまらない生徒には筆者が、英語の面で苦勞している生徒にはALTが主に支援を行った。

4時間目の口頭発表に当たっては、「自分が話することだけが大切で、あとは関係ない」ということにならないよう、評価プリントによる発表の評価をさせたり、発表終了後に質問をさせたりして、聞くことにも集中させるようにした。

生徒の反応 ー市教育委員会のアンケート結果よりー

では、大多数の中学生より週当たり1時間多い英語の授業を、生徒たちはどのように考えているのだろうか。

2月に成田市教育委員会が市内の中学生全員に行ったアンケートの結果によると、「あなたは英語の授業を楽しんでいますか」の問いに対し、70%が「はい」と答えている。また、「あなたは学校での英語の授業の内容がよくわかりますか」の問いに対して、「はい」と答えた生徒は71%となっている。レギュラーと4英、どちらが要因であるかは判断できないが、中学生になると自己肯定感がだんだんと低くなるにもかかわらず、こうした数字が出ている結果は、先生方の日ごろからの努力のたまものといえるのではなかろうか。

「中学校で学んだこと」＝ 「今後、高校で必要になること」

本稿を書くに当たって、SELHiの報告書や各種資料を見直した。SELHiのときに自分が書いた指導案と、中学校で書いた略案と細案を見比べてみると、決定的に違うところがあり、先般、参観する機会に恵まれた北海

道のある高校の指導案も見てみたが、「やはり違うなあ」との思いを強くした。

それは何か？ その時間における、生徒の「評価」である。高校の指導案にはそれが欠けている。

高校の新学習指導要領で大きく取り上げられているのは、「英語の授業は英語で行うのが基本」ということであるが、立教大学・松本茂教授が本誌2009年春号で述べられているように、重要な点は「生徒が主体的に行う活動が中心の授業」ということである。オール・イングリッシュに目を奪われて、それを指摘した意見は少ない（と思われる）のでここでふれておきたい。「指導と評価の一体化」とよくいわれるが、そのとおりであるならば、高校の新学習指導要領は授業のスタイルだけでなく、評価のあり方にも変革を迫っているといえるだろう。

高校で「生徒が主体的に行う活動」を授業に取り入れると、どう生徒を見取り、評価していくのか。中学校では、レッスン全体だけでなく、授業1時間に対しても評価規準を明確化している。略案・細案を問わず、指導案ではきちんと文字化しており、筆者も文字化するよう指導を受けた。テストで何点を取るのが高校における評価・評定の最大の材料では済まされない時代が来たといえる。高校の教員が中学校の教員から学ぶべきことは多い。



「英語好き」な子を育てるために — 小学校における英語活動 —

春日部市立粕壁小学校 鈴木 秀明



1 はじめに

本校は、平成9年度から文部省研究開発学校の指定を受け、「小学校における英語活動の教育課程への位置づけ」について研究を行ってきた。小学校において、英語活動を導入した場合の指導方法や教材の開発が進められ、「粕壁小方式」とまでいわれる英語教育の方法が創造されてきた。さらに、平成15年度からは、春日部中学校とともに3年間の文部科学省研究開発学校の指定を受けて研究を進めてきた。昨年度は、小学校に英語科を新設した場合に必要なとされる教育課程の内容、指導方法、指導教材、評価の方法について、小学校と中学校の接続を視野に入れた英語科の指導内容や方法、評価について改めて検討し、体系化された9か年の連続した教育課程を開発することができた。

2 粕壁小方式「E-タイム」「E-タイムL」

粕壁小学校の英語学習は、毎朝9分間の「E-タイム」と週1回45分の「E-タイムL」の2つのタイプの指導時間から成り立っている。「E」は、“Enjoy”, “English”, “Everyday”の「3つのE」を意味している。

毎朝行われる「E-タイム」は、本校で独自開発された課題スキットのビデオを視聴しながら、リズムやイントネーションをまねて話す時間で構成されている。さらに、歌やダンス、スキットを発展させたゲームなど、楽しく活動しながら練習する時間も設定している。同じスキットをシャワーのように耳にし、基本的な言い回しや英語の音を身に付けていくという、英語をインプットする時間として考

えている。「E-タイム」で使用しているスキットは、身の回りのことをテーマに、春日部市のALTの協力を得て作成したオリジナル作品である。各学年4月から3月まで、それぞれ内容が異なり、ビデオテープで保管されている。

一方、「E-タイムL」の時間は、「E-タイム」で学習した英語表現、をゲームや模擬体験などで活用することを通して、学習意欲の拡大を図るとともに、英語を使う楽しさを味わわせる時間である。児童たちは担任の指導のもとに、ALT（やJTE）と一緒に買い物ゲームや道案内ゲーム活動を英語で行う。原則として、担任教師もすべて英語を使い、児童たちも自分たちが使える英語のすべてを使って活動する。インプットの「E-タイム」に対し、英語をアウトプットする時間として位置づけている。

どちらの学習も、基本コンセプトは“Do your best”。“Big voice”, “Eye contact”, “Smile”, “Try”を目指して活動している。

3 活動の実際（5年 E-タイムL）

① あいさつ

HRT: Let's start our English lesson now. Let's say “Hello”.

Ps: Hello, ○○ sensei.

ALT: Hello, everyone. How are you today?

Ps: I'm fine, thank you. And you?

HRT: I'm fine too, thank you.

② 歌 “The Muffin Man”

HRT: Let's sing “The Muffin Man.”

Ps: Yeah!

③ フレーズの練習

HRT: Let's practice. Repeat after ○○ *sensei*.

Ps: Yes.

ALT: Please listen carefully.

④英語ノートを使い “I will go to ～.” の言い方を聞き取る

HRT: Please listen carefully and write your answers on your textbook.

ALT: Are you ready? Please listen carefully.

Ps: Yes.

(ALT の発音を聞き、登場人物が行く予定の国名とその理由を線で結ぶ。終わったら、全員で答え合わせをする)

⑤かるたゲーム

HRT: Let's play the “Karuta” game! Please watch the demonstration. (グループごとに分かれ、12 枚の国名が書かれたカードを裏にして広げる)

P_{3,4,5}: Where will you go this summer?

P₁: (カードを 1 枚引く) I will go to ～.
How about you?

P₂: (カードを 1 枚引く) I will go to ～.

P₁: That's great. Have a great summer vacation!

P₂: You, too.

(P₁ と P₂ が同じ行き先のカードであれば、その 2 枚のカードを減らすことができる。合わなければ、また裏返しにしてもどし、12 枚のカードが早くなくなったチームが勝ち)

⑥ BINGO ゲーム

HRT: Next, let's play “BINGO” game. Please watch the demonstration.

Ps: Yeah!

HRT: Let's start! (ペアを探して会話し、友達の言った国名をビンゴ・カードにチェックしていく)

P₁: Where will you go this summer?

P₂: I will go to ～.

P₁: That's great! Have a great summer vacation!

P₂: You, too. (交代して繰り返す)
(ビンゴが 3 ライン並んだら、ALT のところ

へ行く)

HRT: Time is over. How many points did you get? Good job.

⑦ Joyful Time

HRT: Let's enjoy the “Joyful Time”!

ALT: Are you ready?

P₁: Where will you go this summer?

Ps: Where will you go this summer?

P₁: Listen!

Ps: Where?

P₁: Spain! (アルファベットが 5 文字なので、5 人のグループを作る)

⑧終わりのあいさつ

HRT: Did you have fun? Today's leaders, please say “Thank you very much.”

P₁: Thank you very much.

Ps: Thank you very much.

ALT: You are welcome.

4 終わりに

本校の英語活動の基本姿勢として、「授業は楽しい」「英語が好き」と思える子を育てることを目標にしている。そのために、教師は指導の工夫、教材の開発、場の工夫など、日々研修に励んでいる。さらに、教師は授業の中で、クラスルーム・イングリッシュを使いながら、授業を進められるようにしている。

これからは、今まで研究してきたことを基盤に、平成 23 年度から本格的に実施される外国語活動との関係について研究していく。取り組み内容は、『外国語を通じた、言語や文化についての体験的な理解、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度、外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しみなど、コミュニケーション能力の素地に関する評価及び評価方法の研究』となる。具体的には、今まで研究を進めてきたコミュニケーション能力の素地に関する評価の観点 (BEST) および評価方法 (自己・相互評価など) について、授業実践を通して検証、さらに研究を深めていきたい。

小学校英語活動支援員として 実践の1コマ

狭山市立入間野小学校 英語活動支援員 木村 利香



1 狭山市での小学校英語活動の取り組み

狭山市は、平成15年9月の構造改革特別区域法により、「外国語早期教育推進特区」として認可され、市内7小学校で「小学校英語活動」が始まりました。平成16年度からは、市内全小学校(17校)で行われるようになり、どの小学校でも一律に英語活動が実施できるように、教育委員会からの委嘱を受けた英語教育推進委員会が「狭山市小学校英語活動指導資料」を作成し、小学校1・2年生は年間10時間(生活科から)、3年生以上は、週1時間、年間35時間(総合的な学習の時間から)の指導内容を設定しています。また、毎年8月の夏季休業中には、市内27校の児童・生徒が参加する2泊3日のSummer Camp、2月にはEnglish Festivalを行っています。

(1) 指導形態は、チームティーチング(TT)

担任の先生と英語活動支援員(市内の小学校に1~3人ずつ配置されている)とのチームティーチングで指導しており、入間野小学校も、狭山市の指導計画・指導内容に沿って取り組んでいます。文部科学省の『英語ノート』は、狭山市小学校英語活動指導資料とリンクしている所を活用しています。

(2) 授業の基本的な流れ

① **Greetings** “Good morning, everyone. How are you today?”, “What is the date today?”, “What day is it today?”, “How is the weather today?”, “What time is it now?” など担任の先生が質問すると、児童は大きな声で元気に答えます。

② **Warm up song** テーマに合った歌を選曲し、リズムに乗って体を動かし、明るく楽

しく歌います。

③ **Useful expression** 担任の先生と英語活動支援員とで、授業時間に学ぶ学習表現・会話の見本を示します。

④ **Activity 1, 2** カードゲームなど、いろいろなアクティビティを行います。

⑤ **Sum up & Good-bye** 担任の先生によってその日の活動のまとめと終わりの挨拶をし、元気よく Good-bye Song を歌って終わります。終わりの挨拶のあと、英語活動支援員とその時間に習った会話、ハイタッチをして、次の再会を約束します。

入間野小学校では、英語活動支援員は英語のみで会話の見本、ゲームの説明などを行います。担任の先生も基本的には英語を使いますが、児童の様子を見ながら日本語でヒントを出し、説明をします。

2 授業における工夫

英語活動支援員は、児童の性格や個性を把握している担任の先生と相談しながら内容をふくらませています。

○常に子どもたちが中心となって進めていけるよう工夫する。

○発展性のあるもの、「楽しい! 次はこうしたい!」と思わせるような内容にする。

○活動内容、形態に変化をもたせて意欲を高める。

○支え合い、助け合って学習できるようにする。

○活動内容によ



り、英語教室、各教室、体育館など、場所を変えて行う。

英語のTTは、担任の先生とのコミュニケーションが不可欠で、自然な流れで児童とともに時間を過ごすことが大切だと考えています。

(1) 教材の工夫

児童が教材作りに参加することもあります。例えば「買い物ゲーム」では、カレーを作りたいグループがお店に買い物に行きます。既製のカードにはニンジン、タマネギ、ジャガイモのカードはありますが、福神漬、ラッキョ、カレールーはないので、その場で店員役の児童が絵を描き作成します。題材「Is this your pencil? Yes, it is. / No, it isn't.」のときは、各自がオリジナル鉛筆を描いて作成、友だちと会話しながら自分の鉛筆を探すゲームをしました。こちらがあらかじめ用意したカードや教材でも、いつも楽しく活動している児童ですが、自作の教材を使ったときには、さらに笑顔が増しているようにも思えます。

学校内にはたくさんの教材の宝があります。算数に使う時計、サイコロ、おはじき。家庭科で使う鍋、フライパン。社会で使う日本地図、世界地図。時には、トランプを見つめながら、何ができるかを考えます。児童がよく知っている「七並べ」のルールから「I get up at 6. I eat lunch at 12. I take bath at 9. I go to bed at 10.」のゲームができました。あるものからゲームを考えるのです。テレビ番組からヒントを得ることもあります。歌や振り付けも、合うものがなければ、作ればよいのです。

(2) ボディーランゲージの大切さ

“What sports do you like? I like baseball.” “What do you want to be? I want to be a singer.” “Can you play the piano? Yes, I can. / No, I can't.” 初めての単語に触



れるときには、始めから絵カードを見せてリピートさせるのではなく、そのスポーツ、職業、楽器を児童がジェスチャーで友だちに伝え、当てるアクティビティを行います。ここで大切にしていることは、相手に伝えたいと思う気持ち、分かりたいと思う気持ちです。これがコミュニケーションの基本だと思っています。万国共通のボディーランゲージ、そこに言語がプラスされることにより、会話を楽しむことができ、世界観が広がっていくと考えています。

2年前、アメリカの高校生とその保護者が来校し、当時5年生の児童たちと交流をはかりました。1人の児童が「先生、僕の英語が通じません。」と泣きそうな声で言ってきました。「気持ちを込めれば通じるよ。」とアドバイスをすると、彼は、「I love you.」と高校生のお父さんに真顔で言っていました。一生懸命気持ちを込めて、自分の知っている英語で会話をしている児童たちが、とても頼もしく見えました。

3 小・中学校接続のありかたについて

6年生に行った英語活動についてのアンケートで、「中学生になって、どんな英語の勉強をしたいですか。」の回答に、「難しい単語を覚えたい。」「長文をスラスラ読めるようになりたい。」「書けるようになりたい。」「英語の先生やALTの先生と会話をしたい。」などがありました。私もそうだったように、ドキドキワクワクした気持ちを持って中学校に進学してほしいと思います。そのためにも、小・中学校それぞれの英語学習への取り組みや、活動内容を理解し、意見交換していくことが大切です。「聞く・話す」を主とする小学校の段階から、中学校での「読む・書く」が加わる学習内容に広がり、英語がブラッシュアップされなければなりません。これからも、児童が英語を好きになれるような手助け、向上心をかき立てるような活動を展開できるよう努力を続けていきたいと思っています。

3月になると街の中では一斉に春のイメージが掲げられ、お店に並ぶものも新しくなる。風は冷たいが、チューリップやスイートピーの花束が飾られていると本当に春が来たような気持ちになる。



ある都内の駅ビルでは、このようなポスターがあちこちに貼ってあった。「リフレッシュオープン」というのは、カタカナ語の表現

としては違和感を感じない。しかし、英語として診断すると、これは誤りである。2行目はさらに変である。

「開店」は正しくは Opening であり、「新装開店」なら Reopening であろう。新店舗や新装された店舗もありますよということなら Grand Opening of New and Remodeled Shops とすれば、長いが正しい英語である。

英語としては間違いなのだが、Refresh Open! は少なくとも2つの点で面白い。1つは英語の品詞がカタカナ語になったとき、どのように解釈されるかという点である。英語では両方とも動詞で、並べても正しい文はできないが、これを見て「新しく開店!」という意味解釈をした人は、カタカナ英語読みができてるといえよう。「オープン」は、「○○支店本日オープン」のように名詞として解釈されている。その前にある「リフレッシュ」は、「○○温泉で心も体もリフレッシュ」のように、同じく名詞として解釈されていて、両方で複合名詞を作っている。ひょっとすると、英語の fresh が形容詞であるために、refresh を英語の形容詞として解釈し、

refresh open も形容詞と名詞からなる名詞句という半分英語的に間違った解釈をしている人もいるかもしれない。

もう1つは「リフレッシュ」と「オープン」の意味的關係の点である。カタカナ英語の解釈では、「(お店が)リフレッシュしてオープン」のように主語が同じという解釈と、「リフレッシュエクササイズ」に見られるように、「エクササイズをすることで体がリフレッシュする」という解釈(正しい英語では refreshing exercise)、つまり、「(お店が)オープンすることで、(お客が)リフレッシュする」という解釈もできるしくみになっている。言い換えれば、これは、カタカナ語のコピーとしてはしっかり機能しているのである。

日本の広告コピーには、このようなものが堂々と出てきているということである。英語としてはもちろん誤りであって、英語圏ではコピーでもなんでもない。ところが、日本人向けのコピーとしてはうまくいっている。これは間違いだと指摘したとして、このコピーの制作者は、「英語のコピーとしては作っていない。」と言うだろう。日本語を母語とする人の文字の認知では、英語を見て、英語の解釈ではなくカタカナ語の解釈をしているのである。

したがって、このコピーを見て憤慨する人は英語としてコピーを読んでおり、納得してしまった人は、英語でなくカタカナ語でこれを読んでいるのである。皆さんのまわりの方々はいかがでしょう。

さて、この4月に全く新しい環境で授業を始められる先生方、私もその1人です。Make a wonderful new start this April!

Once a noun, always a verb!

東海大学

Peter J. Collins

The other day, my friend Takuzo called me with some questions. The telephone connection was weak, though, so I had to keep asking, “Could you repeat that?”

“Oh, sorry,” he answered. “It’s because I’m Skyping you from my computer.”

Takuzo’s response wouldn’t have made sense to me ten years ago. It wouldn’t even have been possible, since in 2000, the Skype software application hadn’t yet been introduced. Skype, as a verb, is an example of a neologism: a newly coined word which is gradually entering common use, but is not yet accepted as mainstream, “correct” English.

One of the most common types of neologism is a noun which takes on a new identity as a verb. We’re more likely to “text Nancy,” for example, than to “send Nancy a text message.” And why “chat with Steven on instant messenger” when we can simply “IM Steven”?

When online mapping services became popular in the late 1990s, you might have heard, “Why don’t you log on to MapQuest and find the restaurant?” Now you’re more likely to hear, “Why don’t you MapQuest the restaurant?” YouTube, the popular video sharing website has also emerged as a verb, as in “I wasted my whole afternoon YouTubing!”

Facebook, a social networking site similar to Mixi, is also used as a verb: “I tried Facebooking him, but I couldn’t find his

name.” Some interesting neologistic verbs have sprung up from Facebook. To “friend someone” means to click on their profile and request to be their online friend. Likewise, to “unfriend” them means to click the “remove as friend” button under someone’s profile.

There are English language purists – even whole clubs and societies of them – who hope to keep English “pure” by stamping out these and other high-tech neologisms. They’re fighting a losing battle, however; in 2009, “unfriend” topped the *New Oxford American Dictionary*’s “Word of the Year” list. Another defeat for the purists came when the American Dialect Society (ADS) voted “tweet” as Word of the Year for 2009. A tweet is a text posting on the social networking and microblogging website Twitter. Ironically, there is some debate among linguists about which is better English: to “tweet someone” or to “twitter someone.”

If a neologistic verb weathers ongoing advances in technology, it might be accepted officially and thrive as a mainstream word. Google is one such verb. It was first used in 1998 by one of Google’s founders, who closed a mailing list message with “Have fun and keep googling!” The ADS voted it the Word of the Year in 2002, and by 2006 it was included in the *Oxford English Dictionary*. In January of this year, the ADS followed up its earlier decision by declaring the verb “google” the Word of the Decade.

Since the dawn of the “Information Age” in the early 1980s, there have been countless technological developments impacting our daily lives. In order to keep up with them, the English language has shown that it can be just as flexible, as dynamic, and as open to change as we are. Take note, purists!



地球となかよし

メッセージ 2010

作品募集 (第8回)

「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたことを、
写真(またはイラスト)にメッセージをつけて表現してください。

応募資格

小学生・中学生(数名のグループ単位での応募も可)

作品テーマ

- ①身のまわりの自然が壊されている状況を見て感じたことや、自然環境や生き物を守るための取り組み
- ②さまざまな人との出会いを通して、友好の輪を広げた体験、異文化交流、国際理解に関すること
- ③その他、「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたこと

応募期間

2010年7月1日～9月30日

詳細は「優秀作品展示室」とあわせてホームページをご覧ください。

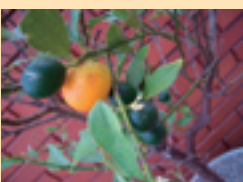
応募者全員に
参加賞が
もらえるよ

応募の決まりなど詳しくはホームページを見てね

<http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/>

2009 入選作品

金柑三代



去年の実は橙色
今年の春咲いた花から実った緑色
この夏開花している白い花
おばあちゃん
おかあさん
そしてわたし
つないでいく 尊い命
大切にしよう 日本の自然

◎主催／教育出版 ◎協賛／日本環境教育学会

◎後援／環境省、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学校新聞
＊こどもエコクラブのパートナーシッププログラムです。

＊協賛・後援団体は昨年実績で、継続申請中です。



教育出版

「地球となかよし」事務局

TEL 03-3238-6982 FAX 03-3238-6975

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-10

英語教育 通信 ONE WORLD Info (2010年 春号) 2010年3月31日 発行

編集：教育出版株式会社編集局 発行：教育出版株式会社 代表者：小林一光

印刷：大日本印刷株式会社

発行所：教育出版株式会社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-10

URL <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp>

電話 03-3238-6862 (お問い合わせ)

E-mail edit-info@kyoiku-shuppan.co.jp



なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

北海道支社

〒060-0003 札幌市中央区北三条西 3-1-44 ヒューリック札幌ビル 6F
TEL: 011-231-3445 FAX: 011-231-3509

函館営業所

〒040-0011 函館市本町 6-7 函館第一生命ビルディング 3F
TEL: 0138-51-0886 FAX: 0138-31-0198

東北支社

〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル 7F
TEL: 022-227-0391 FAX: 022-227-0395

中部支社

〒460-0011 名古屋市中区大須 4-10-40 カジウラテックスビル 5F
TEL: 052-262-0821 FAX: 052-262-0825

関西支社

〒541-0056 大阪市中央区久太郎町 1-6-27 ヨシカワビル 7F
TEL: 06-6261-9221 FAX: 06-6261-9401

中国支社

〒730-0051 広島市中区大手町 3-7-2 あいおい損保広島ビル 5F
TEL: 082-249-6033 FAX: 082-249-6040

四国支社

〒790-0004 松山市中街道 3-6-1 岡崎産業ビル 5F
TEL: 089-943-7193 FAX: 089-943-7134

九州支社

〒810-0001 福岡市中央区天神 2-8-49 福岡富士ビル 8F
TEL: 092-781-2861 FAX: 092-781-2863

沖縄営業所

〒901-0155 那覇市金城 3-8-9 一粒ビル 3F
TEL: 098-859-1411 FAX: 098-859-1411